台北医学大学研修報告書

研修期間：2026 年 3 月 9 日～3 月 20 日
看護学部 3 年　南　佳那

私は国際的な視野を広げることと自分に自信をつけることを目的に本プログラムに参加しました。これまで海外へ行った経験がなく、英語への苦手意識もあったため興味はあるものの留学に踏み出すことができずにいました。しかし、学生でしかできないことに挑戦してみたい、自分の視野を広げてみたいと思い、留学を決意しました。領域別実習期間中で準備は十分とはいえず、初めての海外で一人という状況に不安を抱えたまま台湾へ向かいましたが、今回視察に来てくださった先生方や同じ研修に参加していた日本人学生の皆さん、現地の先生方や学生の皆さんの支えにより、充実した研修になりました。

研修では長期ケアや先端技術を活用したシミュレーション教育、災害医療、産後ケア、東洋薬学などについて学びました。台湾は IT 先進国であり、IT を活かした看護教育が活発に行われていました。例えば、自宅で高齢者が快適に過ごすための自宅環境を考える際には自宅環境を VR で作成し、高齢者の視点で環境を検討できるように工夫されていました。講義の中で特に印象に残っているのは産後ケアについてです。日本では出産後約 1 週間で退院し、自宅で家族とともに育児が開始されますが、台湾では「坐月子」という文化があり、産後約 1 か月間は安静を保ち身体の回復を重視します。この期間中は、冷たいものを飲まない、髪を洗わない、あまり動き回らないといった習慣があることを知りました。また、産後のサポートとして、産後ケアホームの利用やベビーシッター付きの在宅ケアなど様々な支援が整っていることも特徴的でした。このような文化や制度の違いを踏まえて、安心して母親や家族が周産期を送れるように支援する必要があると学びました。

台北医学大学の提携病院である万芳病院の見学では、高齢者病棟と血液透析センター、RICU（Respiratory Intensive Care Unit）へ行きました。病棟では QR コードを活用した患者教育などペーパーレス化が進んでおり、患者さんが主体的にリハビリに取り組める環境が整っていました。血液透析センターは 73 床と病床数は多く、急性期や重症期の血液透析と血液浄化のニーズに対応していました。RICU は Wi-Fi 環境下で、スマートフォンで患者さんのバイタルサインなどを確認することが可能で、薬の管理では誤薬がないようにシステム管理が徹底されていました。このように IT 技術を活かした看護実践が進んでいることが印象的で、デジタル管理システムの活用により患者さんに安全で効率的な医療が提供されていると感じました。

現地学生との交流では、日本人学生 1 名に対してバディとして 1～2 名の学生がサポートしてくれました。事前の連絡では交通などの情報を教えてもらい、ご飯の約束もしていました。1 日のプログラムの終わりにはカフェや遊びに連れて行ってくれました。言語の壁からコミュニケーションがうまくいかないこともありましたが、翻訳機やジェスチャー

などを使って交流を深め、楽しい日々を共に過ごすことができました。さらにプログラムでは、現地の建造物や文化に触れる機会も多く、日本との違いを体感することができました。

今回の研修を通して、自分の視野や考え方が広がり、新たな価値観に触れることができました。また、困っていた際には先生や学生の方々だけでなく、現地の人たちにも何度も助けていただき、言語が異なっていても人の優しさや温かさは同じであることを実感した2週間でした。この経験を今後の看護実践や将来に活かしていきたいと考えています。さらに、英語学習にも継続的に取り組み、他国の人々との交流をより深めていきたいです。

さいごに、留学の準備から研修終了までお世話になりました大阪医科薬科大学の先生方、台北医学大学の先生方や学生の皆さん、そして研修に共に参加した日本人学生の皆さんに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

【授業風景】

【プログラム修了式】

【学外交流】